

1次元局所環のm-準素イデアルのHilbert係数*

谷口直樹（明治大学理工学部）

A は可換 Noether 局所環で次元 d とし, \mathfrak{m} を極大イデアルとする. 環 A 内の \mathfrak{m} -準素イデアル I に対し, 函数 $\ell_A(A/I^{n+1})$ ($n \geq 0$) をイデアル I の Hilbert 函数と呼ぶ. ここで, $\ell_A(A/I^{n+1})$ は, A -加群 A/I^{n+1} の長さを表す. Hilbert 函数は十分大なる整数 $n \gg 0$ に対し, 等式

$$\ell_A(A/I^{n+1}) = e_0(I) \binom{n+d}{d} - e_1(I) \binom{n+d-1}{d-1} + \cdots + (-1)^d e_d(I)$$

で与えられる. 但し, $\{e_i(I)\}_{0 \leq i \leq d}$ は整数である. 右辺の多項式をイデアル I の Hilbert 多項式と呼び, 整数 $e_i(I)$ を I の第 i -Hilbert 係数と呼ぶ. なかでも, 最高次の係数である正整数 $e_0(I)$ は, イデアル I に関する環 A の重複度と呼ばれ, これまでに深い研究が行われている.

Hilbert 函数の挙動は, そのイデアルのみならず基礎環 A の性質を反映することが知られており, 局所環の構造解析のための主要な指標の一つとなっている. 本講演の目的は, $d = 1$ の場合の第 1-Hilbert 係数 $e_1(I)$ の挙動解析にある.

イデアルの第 1-Hilbert 係数については, [6, 7] など, 先行する多くの研究がある. 巴系イデアルに関しては, 環の Cohen-Macaulay 性との関りで, 1960 年代に完成度の高い研究が行われて以降, あまり大きな進展は無かったと思われる. しかしながら最近, 後藤四郎, 大関一秀, W. V. Vasconcelos 達によって, 巴系イデアルの第 1-Hilbert 係数の研究が再開され, 興味深い成果が得られるに至った ([1, 2, 9, 10]). 彼らの研究によって, 巴系イデアルの第 1-Hilbert 係数の取り得る値には, 局所環の個性が鋭く反映されることが明らかになるなど, Hilbert 係数解析の重要性が改めて確認されたと言いうことができる.

私の講演では, 一般の \mathfrak{m} -準素イデアルの Hilbert 係数について, 1次元の場合に限って, その挙動を調べる方法を紹介したい. 後藤四郎, 松岡直之, Tran Thi Phuong [5] による Almost Gorenstein rings の理論やその高次元化 [3], また [1, 2, 8, 9, 4] など, Hilbert 係数 $e_1(I)$ に関する結果はその多くが 1次元の場合に帰着できることを考えるとき, 私達の方法と結果も, 高次元の局所環上の Hilbert 函数解析の基礎理論として, 一定の役割を果たすと期待される.

主定理は, 以下のとおりである.

定理 1. (A, \mathfrak{m}) は 1次元の Noether 局所環とする. このとき, 等式

*後藤四郎先生の指導下に行われた, 小浦あす貴氏との共同研究を基盤にしています.

$$\sup\{e_1(I) \mid I \text{ は } A \text{ の } m\text{-準素イデアル}\} = \ell_B(\overline{B}/B) - \ell_A(H_m^0(A))$$

が成り立つ．但し， B は環 $A/H_m^0(A)$ の $m/H_m^0(A)$ -進位相に関する完備化 $\widehat{A/H_m^0(A)}$ を表し， \overline{B} は環 B の全商環 $Q(B)$ 内での整閉包を表す．

系 1. 集合

$$\Lambda(A) = \{e_1(I) \mid I \text{ は } A \text{ の } m\text{-準素イデアル}\}$$

が有限であるための必要十分条件は，整閉包 \overline{B} が環 B 上の加群として有限生成であること，即ち，局所環 $A/H_m^0(A)$ が analytically unramified であることである．

系 2. A は一般の Noether 局所環で $d = \dim A > 0$ なるものとする． I を環 A の m -準素イデアルとすれば，任意の整数 $k \geq 1$ について

$$e_0(I^k) = k^d \cdot e_0(I), \quad e_1(I^k) = \frac{d-1}{2} \cdot e_0(I) \cdot k^d + \frac{2e_1(I) - e_0(I) \cdot (d-1)}{2} \cdot k^{d-1}$$

が成り立つ．故に，集合 $\Lambda(A) = \{e_1(I) \mid I \text{ は } A \text{ の } m\text{-準素イデアル}\}$ が有限なら， $d = 1$ であって，環 $A/H_m^0(A)$ は analytically unramified である．

$\dim A = 1$ の場合に帰り，集合 $\Lambda(A)$ が無限である例を述べておく．

例 3. $k[[X, Y]]$ は体 k 上の冪級数環とし， $A = k[[X, Y]]/(Y^2)$ とすると， $\Lambda(A) = \{n \mid 0 \leq n \in \mathbb{Z}\}$ であって，もちろん $\sup \Lambda = \infty$ である．

他に，直ちに得られる系と例を述べておく．

系 4. a_1, a_2, \dots, a_ℓ は正整数で， $\text{GCD}(a_1, a_2, \dots, a_\ell) = 1$ とする． $k[[t]]$ は体 k 上の形式的冪級数環とし， $A = k[[t^{a_1}, t^{a_2}, \dots, t^{a_\ell}]]$ ， $H = \langle \sum_{i=1}^{\ell} c_i a_i \mid 0 \leq c_i \in \mathbb{Z} \rangle$ とおく．このとき， $\Lambda(A) = \{0, 1, \dots, q\}$ である．但し $q = \sharp(\mathbb{N} \setminus H)$ とする．

系 5. $n \geq 1$ は整数とし， $A = k[[t^n, t^{n+1}, \dots, t^{2n-1}]]$ とする．このとき

$$I = (t^n, t^{n+1}, \dots, t^{2n-2})$$

は環 A の正準イデアルであって，

$$e_1(I) = \begin{cases} r(A) - 1 & (n = 1, 2), \\ r(A) & (n \geq 3) \end{cases}$$

である．但し， $r(A)$ は環 A の Cohen–Macaulay 型 $\ell_A(\text{Ext}_A^1(A/m, A))$ を表す．

例 6. K/k は有限次体拡大で， K と k の間には真の中間体が含まれていないとする． $K[[t]]$ を体 K 上の形式的冪級数環とし， $A = k[[Kt]] \subseteq K[[t]]$ とおくと

$$\Lambda(A) = \{0, n-1\}$$

である．但し $n = [K : k]$ である．従って， $n \geq 2$ であっても $\sharp \Lambda(A) = 2$ となり，集合 $\Lambda(A)$ が非常に小さいことが分かる．

講演では，他にも具体的に与えられた局所環 A に対し，集合 $\Lambda(A)$ がどのように変化するか，報告したい．

参考文献

- [1] L. Ghezzi, S. Goto, J. Hong, K. Ozeki, T. T. Phuong and W. V. Vasconcelos, *Cohen–Macaulayness versus the vanishing of the first Hilbert coefficient of parameter ideals*, J. London Math. Soc., **81** (2010), 679-695.
- [2] L. Ghezzi, S. Goto, K. Ozeki, J. Hong, T.T. Phuong, and W. V. Vasconcelos, *Variation of the first Hilbert coefficients of parameters with a common integral closure*, Journal of Pure and Applied Algebra, **16** (2012) 216–232.
- [3] S. Goto, *Almost Gorenstein rings – an attempt towards higher dimensional cases* –, Preprint 2011.
- [4] S. Goto, J. Hong, and M. Mandal, *The positivity of the first normalized Hilbert coefficients*, The Proceedings of the American Mathematical Society, **139** (2011), 2399–2406
- [5] S. Goto, N. Matsuoka, and T. T. Phuong, *Almost Gorenstein rings*, Preprint 2011.
- [6] S. Goto, K. Nishida, and K. Ozeki, *Sally modules of rank one*, Michigan Math. J., **57** (2008), 359–381.
- [7] S. Goto, K. Nishida, and K. Ozeki, *The structure of Sally modules of rank one*, Mathematical Research Letters, **15** (2008), 881–892.
- [8] S. Goto and K. Ozeki, *The structure of Sally modules - towards a theory of non-Cohen-Macaulay cases* - J. Algebra, **324** (2010), 2129-2165.
- [9] S. Goto and K. Ozeki, *Buchsbaumness in local rings possessing constant first Hilbert coefficients of parameters*, Nagoya Math. J., **199** (2010), 95-105.
- [10] S. Goto and K. Ozeki, *Uniform bounds for Hilbert coefficients of parameters*, ”Commutative Algebra and its Connections to Geometry (PASI 2009)”, Contemporary Mathematics of AMS, **555** (2011), 97–118.